

発語「さあ」の意味とその使用がコミュニケーションに与える影響について

松岡 みゆき(愛知文教大学)

matsuoka@abu.ac.jp

1 問題の所在

日本語には「さあ」「さあ」「さー」等と表記され、感動詞に分類される形式(以下、「さあ」で代表させる)がある。人はこの「さあ」をどのような場合に用い、またその発語からどのような影響を受けるのか。

2 人が「さあ」と発語する時とはどのような時だろうか？

◆「さあ」の運用には何らかの条件が必要であると考えられる。

- (1)(屋外を歩いていて雨が降ってきたことに気づいた際に)「雨だ」と言えるが、「さあ、雨だ」と言うにはそれを許す状況が必要
- (2)(実験を他者に見せながら説明している状況で)「さあ、これを水につけてみます」と言えるが、(カフェで注文時に)「さあ、今日はカフェオレにしてみます」と言うにはそれを許す状況が必要
- (3)学生に向けて「さあ、授業を始めます」と言えるが、学会発表時に発表者は「さあ、発表を始めます」と言えるか？前の発表が終わったのを見た次の発表者が「さあ、自分の番だ」と内言するのは自然

◆「さあ」は様々な状況で運用される。

「はあって言うゲーム」(幻冬舎)の「さあ」の選択肢

- A. とぼけた「さあ」、B. 料理をふるまう「さあ」、C. 物語の始まりに「さあ」、D. お客を集めるときの「さあ」、E. 冷たく「さあ」、F. 実況中継の「さあ」、G. 帰るときの「さあ」、H. そよ風の「さあ」

3 辞書における「さあ」の記述

◆goo 国語辞書(2021年3月24日検索)

- さあ[感]: 1. 人を誘い、またはせきたてるときに発する語。「さあ、始めよう」「さあ、お入りください」
2. ためらいや否定的な気持ちを表したり、即座の返答を避けたりするときに発する語。「さあ、私にできるかしら」「さあ、よくわかりません」
 3. 新しい事態に直面したとき、また、行動を起こそうとしたり終えたりしたときなどに発する語。「さあ、大変だ」「さあ、やるぞ」「さあ、これでできた」
 4. 相手の言葉をおさえて、こちらが話そうとするときの語。「『先だっこの件です

が』『さあ、そのことだ、実は取り止めになったんだ』」

◆『新明解国語辞典第8版』

さあ：[新たな事態に出会ってなんらかの対応を迫られた時や積極的に行動を起こそうとする時などに]他人や自分に言って聞かせるつもりで発する語
⇒これらの複数の意味の記述は簡単に共通性を見出せるものではない。しかし「さあ」という同じ形態が発話文の頭という同じ環境で発語されるのであるから、それを一つの形式と考えるのが自然であろう。

4 先行研究

4.1 森山・張(2002)における「さあ」の意味記述

感動詞：1.対他的感動詞類(その機能の中心が対話的なもの)

2.非対他的感動詞(対他的ではないもの。聞き手不在の発話でも使用されるが、聞き手のいる発話で話し手の心的状況をモニターすることで聞き手に対し談話展開を制御する機能も持ち得るもの)

「さあ」：非対他的感動詞の中の動作実行連動系動作発動類の感動詞(現実世界での動作実行に連動して発話されるもの。動作を促す。)

「さあ」の基本的意味：状況が、何らかの動作発動を含む段階に更新されたことを表す

3つの用法：1)動作発動用法(例：さあ、早く御挨拶をなさい)

2)時機到来用法(例：ニンニク炒めのスパゲティもいいぞ。さあ、食欲の夏だ)

3)留保表示類(例：さあ、どうしてかしら?)

疑問点

→動作発動を含む段階にあっても「さあ」の使用が不自然な場合を説明することができない(例えば(2)(3)の例)

→留保表示類の「取り込み」に関わる問題

留保表示類＝「応答が必要な状況という認識の表示」(森山・張 2002:135)

「応答が必要な状況という認識を言語場で表示すること」と「『さあ』の使用が丁寧さを生むこと」との矛盾(→定延(2016)の指摘に類似する問題)

4.2 従来の発話観では説明のつかない「さあ」(定延 2016,2020)

定延(2016,2020)

「伝達を前提とするコミュニケーション観と相容れないと思えるもの」の一事例として「さー」の問題が挙げられている。

「さー」の否定的性質：後続する発言内容が相手の期待に沿わないもの

→否定的な検討結果を踏まえて発せられる検討中のフィルター

「さー」の使用は状況によっては「丁寧さ」と結びつく。

(4)X：あ、すみません、このあたりに交番ありませんか？

Y：a. このへん交番は無いですね。

- b. ちょっとわかりません。
- a'. さー、このへん交番は無いですね。
- b'. さー、ちょっとわかりません。 (定延 2016)

- ・伝達を前提とするコミュニケーション観(コミュニケーションとは情報の伝え合いである)
 - 期待に沿えない結果になることを検討していることを示す→愚弄、意味不明→「丁寧さ」が生じることが説明できない。
- ・意図を前提とするコミュニケーション観(発話は意図的になされるものである)
 - 「質問者に否定的な答を返す前に、質問者が受けるであろうショックをやわらげるために、『あなたにとって悪い知らせがありますよ』と言うような前触れのことばが『さあ』なのだ」(前触れ説)→「さあ」は考えている最中の仕草で発話される／直後に考えている最中のことばが後続し得る→前触れ説も破綻する(定延 2020:4)

↓

「あからさまにやって見せる」発話観

→「考えても相手の期待に沿わない結果しか出てこない考え事を、「さー」と言ってあからさまにダメ元でしてみせることは、状況によっては丁寧さと結びつく」(定延 2016:145)と説明可能

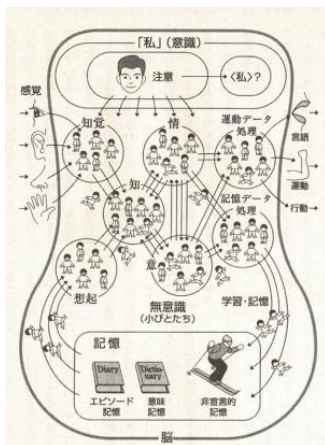
5 研究目的

複数の用法を持つ「さあ」という形式が内包しているものを、その運用例を包括的かつ統一的に捉えられる示し方で提示すること

6 運用例の分類・考察の方法

運用例の分類基準：①外界事象、②「さあ」の分出内容→選定理由(6.1、6.2)

6.1 外界事象を刺激とした発話



「図の中央付近に描いたたくさんの小びとが(言い換えれば、第5章の図 20(b)に描いたようなニューロン群が)、「知」「情」「意」の処理をせせと行っている。また、図の左側には、感覚器からの情報の前処理である「知覚」や、記憶の「想起」を行う小びとたちがいる。図の右側には、言葉を話したり運動や行動を起こすための「運動データ処理」、考えた結果を記憶したり学習したりする「記憶データ処理」を行う小びとたちもいる。そして、情報は、「意識」される時以外、小びとたちによってせせと「無意識」のうちに処理される。」(前野 2010:39)

「脳の中の『私』と小びとたちについてのこれまでの考え方」を示した図(前野 2010:40)

これを踏まえた本研究の考え方

- ・発話者は外界事象を知覚し、その影響を受ける(内的変化がある)。

- ・外界事象は視覚や聴覚等の知覚器官の別を問わず知覚される事象を指す。他者の発話もその一つである。
- ・その影響(内的変化)の「発露」として発話がある。
- ・そこに「意思」というパラメータが加わり、発話の有無や在り様が定まると考える。この「意思」には「自分をどう見せるか」「他者に伝える意思」といったものが考えられる。

6.2 分出(森重 1959)

森重(1959)

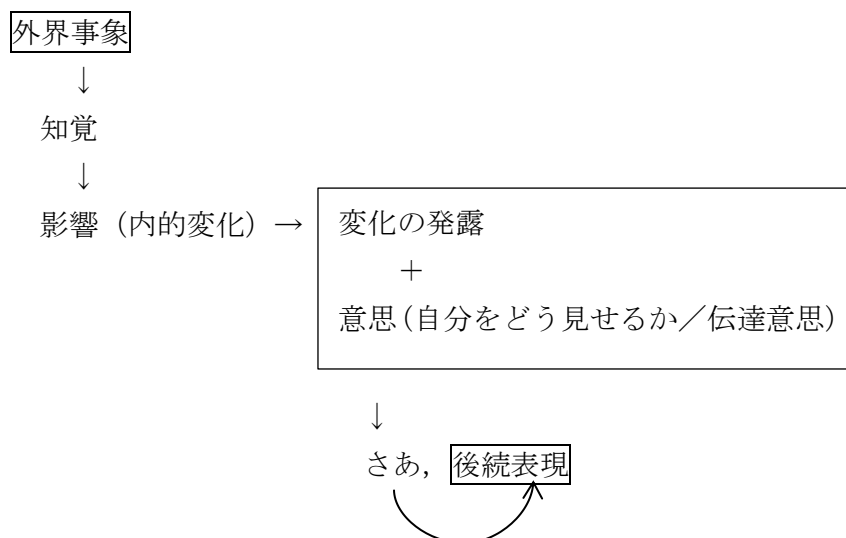
「文における文相当のありかたをする特殊成分とは、応答語・感動語・呼掛語と、挿入句・呼掛句とである。応答語は「花は咲いたか。－はい、咲きました。」の「はい」、感動語は「あゝ、花も散った。」の「あゝ」、呼掛語は「おゝ、花よ。」の「おゝ」のようなものであるが、これらは「咲きました。」「花も散った。」「花よ。」というそれ自体文であるものと相関しつつ、しかもその相関の全体がまた文であることによって、相関の文全体のなかに特殊な位置を占める。ここに「はい」「あゝ」「おゝ」と「咲きました。」「花も散った。」「花よ。」という文との相関というのは、意味のうえからいって、前者が後者をそれぞれ分出したというありかたであるといわねばならない。前者は、本来後者となって分出すべき意味の内在しているものである。前者はこの意味において文相当である。」 (森重 1959:112)

↓

「さあ」の後に続く表現は、「さあ」が内包するものが「さあ」から「分け出でて」顕在化したものとする。

6.3 運用例の分類方法

「さあ」には、「さあ」の発語の刺激となった外界事象と、後続表現の意味内容が内包されていると考える。そこで本研究では、運用例の分類方法として「さあ」が使用された実例を「外界事象」と「分出内容」の2点で分類・整理する。その分類を元に考察を行う。



7 「さあ」の4分類

- 1)外界事象 A を刺激とし、A に対する判断内容 B が分出する。「A は B だ」という構造が分出
(顕在化)する「さあ」→【A=B 型】
- 2)外界事象 A を刺激とし、A に対する判断内容 B が潜在化し、導出する行動 C が分出する。
「A は B だ。よって C」という構造を内包する「さあ」→【[A=B]→C 型】
- 3)外界事象 A を刺激とし、A に対して「どのように対応するか」という内容の表現 C が分出する。
「A は B だ(B:特定の判断内容)」と判断し、B だから「どうするか」(行動 C)が分出する場合と、「A は B だ(B:不明だ)」と判断し「不明だ」から「どうするか」(行動 C)が分出する
場合がある。「A は B、よって『どうするか』」という構造を内包する「さあ」→【[A=B]→C:C
=「どうするか」型】
- 4)外界事象の一つである他者の「問いかけ」(A)を刺激とし、A に対して「不明だ」という内容の
表現 B が分出する。「A は B だ(B:不明だ)」という構造を内包する「さあ」→【A=B:B=「不
明だ」型】

8 考察①「さ」が内包するもの

8.1 A=B 型

外界事象 A に対する判断内容 B が分出する例(以下、例の下線は引用者によるもの)

(5)X「さあ時間だ」 (作例)

→外界事象 A=B(5 時という予定していた時刻だ)

(6)一本の線につながりかけたお点前を、突然、変えなければならない日がやってきた。(中略)
突如出現した「穴」を、私とミチコは見つめていた。

先生「さあさあ、今日から、「炉」ですよ」 (日)

→外界事象 A=B(今日は炉に切り替える日だ)

「goo 国語辞書」の「相手の言葉をおさえてこちらが話そうとするときの語」という記述はこれに該当する。

(7)「先だつての件ですが」「さあ、そのことだ、実は取り止めになったんだ

→外界事象 A(前文)=B(「先だつての件」は「そのこと(=話したかったこと)だ)

⇒いずれも A=B から導出される行動 C を含む。

8.2 [A=B]→C 型

[A=B]から導出される行動 C が分出する例

(8)バスをおりると、ライオンりよかんのりっぱなネオンが、目にとびこんできました。

ゾロリ「さあ、いっしょにあのりよかんにとまりましょう。」 (か)

→外界事象 A=B(旅館だ)という判断を含む。

(9)先生「みなさん、明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願ひいたしま

す。この一年も、一生懸命ご精進くださいね」
 私たちは扇子を前に
 私たち「今年もよろしくご指導ください」
 と、口々に言って、全員で顔を上げる。挨拶が終わると先生は
 先生「さあ、それじゃ、私がお点前します。ちゃんと見ててくださいね、私も間違えるんで
 すから。」 (日)
 →外界事象 A=B(全員顔を上げた=挨拶が終わった)という判断を含む。

8.3 [A=B]→C : C=「どうするか」型

外界事象 A に対して具体的な判断または「不明だ」という判断を行い、その判断から導出する
 行動 C(C:どうするか)が分出する例

◆外界事象 A=B(B:具体的な判断)

(10)(試験の結果通知(外界事象 A)を視覚的に知覚し「悪い結果だ」と判断して)

X「さあ、どうしよう」 (作例)

(11)(みくりが「恋人」になろうと提案する場面)

みくり「平匡さんが嫌なら、引き下がります！」

津崎「！」

みくり「これは、平匡さんの、自由意志です！」

津崎「……自由、意志」

みくり「はい、どうしますか」

(中略)

みくり M「さあどうする、どうする、平匡さん!」 (逃)

⇒外界事象 A=B(B:悪い結果だ、恋人になろうという提案がなされた)という具体的な判断を
 含む。

◆外界事象 A=B(B:不明だ)

(12)X「今年の母の日のプレゼント何がいいかな？」Y「さあ、どうしようね」 (作例)

⇒外界事象 A(前文)=B(B:わからない)という判断を含む。

8.4 A=B : B=「不明だ」型

外界事象 A(前文である他者の問いかけ)=B(B:不明だ)を分出する例

(13)X「これ何？」Y「さあ、わからない」 (作例)

(14)十月半ばのお稽古日、私はその掛け軸を見ていた。「○」

私「……？」

文字ではない筆で、ただクルリと、大きな丸が描いてある。

先生「今日のお軸は、さあ、なーんだ?」

私「……？」 (日)

◆内包しているものが分出されない例

(15)百合「今のなに？」みくり「さあ」 (逃)

8.5 考察①のまとめ

意識的または無意識的に「考える」過程を経て「わかる」「わからない」がある(山鳥 2002)。「わからない」も判断の一つである。また、判断と行動(運動意図の発現)は深く関連し、連動している(柴崎 2015)。

↓

「AはBだ。よってCする」から「AはBだ。よって『どうする』」、「Aは不明だ。よって『どうする』」へと拡張する可能性はあると考えてよいだろう。

$$\begin{array}{l} [A=B](\rightarrow C) \quad [A=B] \rightarrow C \\ B: \text{具体的内容(8.1)} \rightarrow (8.2) \\ B: \text{不明だ(8.4)} \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} [A=B](\rightarrow C) \\ B: \text{具体的内容(8.1)} \rightarrow (8.2) \\ B: \text{不明だ(8.4)} \end{array}} \right\} C: \text{「どうするか」} \quad (8.3)$$

以上のことから、本研究の研究目的に対する答えは下記の(16)となる。

(16)「さあ」は次の論理展開を内包すると考え得る。

外界事象 A は B である。よって行動 C が生起する。

これを単純化して $[A=B] \rightarrow C$ と記す。知覚した外界事象 A に対する反応(その影響の発露)として、 $[A=B] \rightarrow C$ を内包する「さあ」を発する。これに「自分をどう見せるか」「相手に伝えたい」等の意思が加わって最終的な運用(の様態)が決まってくると考える。

9 考察②検証すべき事項

- ・「 $[A=B] \rightarrow C$ 」でない場合に「さあ」の使用は不自然か？
- ・(16)は「さあ」の運用可否を説明できる結論か？

9.1 「 $[A=B] \rightarrow C$ 」でない場合に「さあ」の使用は不自然か

- ・判断してもそれが行動の生起可能性を伴わない場合($[A=B] \Rightarrow \ominus$) → 9.1.1
- ・瞬時的・反射的に判断を口にした発話の場合($[A=B]? \rightarrow C$) → 9.1.2
- ・行動理由となる判断からの導出であるという側面が希薄な衝動性の高い行動の場合 ($\{A=B\} \Rightarrow C$) → 9.1.3

9.1.1 判断してもそれが行動の生起可能性を伴わない場合($[A=B] \Rightarrow \ominus$)

判断が行動を導出する可能性がない場合、「さあ」は使わない。例えば、飛行機雲を見つけた(外界事象=飛行機雲と判断した)ことで完結する場合。飛行機雲が生じたら写真を撮ることを想定している等の場合は「さあ」を使用することも考え得る。

(17){あ/*さあ}、飛行機雲！

9.1.2 瞬時的・反射的に判断を口にした発話の場合($[A=B]? \rightarrow C$)

瞬時的・反射的に判断を口にした発話の場合、結果的にそれが行動の生起理由になり得ると

しても「さあ」は使わない。

(18)あ、田中が来た！ (作例)

(19)やば、時間だ！ (作例)

「さあ、田中が来た！」という発話が使われる時とは、対象が来ることが想定され、実際に「来た」と判断できた場合の行動が想定されている場合(例：田中が来たら出発しようと予定している等)

9.1.3 行動理由となる判断からの導出であるという側面が希薄な衝動性の高い行動の場合($[A=B] \rightarrow C$)

外界事象の刺激に対して反応(行動)を抑えることができず衝動的に反応(行動)してしまう場合に、特定の言語表現を運用するとは考え難い。

9.1.4 9.1 のまとめ

$[A=B] \rightarrow C$ ではない場合に「さあ」の運用可能性は極めて低い。よって「さあ」は、「 $[A=B] \rightarrow C$ 」を内包すると考える。

9.2 (16)は「さあ」の使用可否を説明できる結論か

(16)は(1)~(3)の「さあ」の使用可否や「丁寧さの問題」を説明できるだろうか？

(20)(屋外を歩いていて雨が降ってきたことに気づいた際に)「雨だ」と言えるが、「さあ、雨だ」と言うにはそれを許す状況が必要(=1)

→判断と導出される行動(C)がセットになっているかどうかの問題。例えば「雨→新しい傘を持って行く」と想定していた場合、外界事象を知覚してこのセットが浮かぶという内的変化が起これば「さあ」が発語され得る。

(21)(実験を他者に見せながら説明している状況で)「さあ、これを水につけてみます」と言えるが、(カフェで注文時に)「さあ、今日はカフェオレにしてみます」と言うにはそれを許す状況が必要(=2)

- ・「実験」の場合→「ある処理が終わったら次に水につける」という行動が予めセットになっている。外界事象＝「その処理が終わった」と判断した際にセットとして浮かべば(内的変化)、「さあ」が発語され得る。

- ・「カフェオレ」の場合→「カフェに来て注文する」という外界事象に対する判断と行動(カフェオレを注文する)のセットが想定されていなければ「さあ」を発語するような内的変化は生じない。その想定があれば「さあ」が発語され得る。

(22)学生に向けて「さあ、授業を始めます」と言えるが、学会発表時に発表者は「さあ、発表を始めます」と言えるか？前の発表が終わったのを見た次の発表者が「さあ、自分の番だ」と内言するのは自然(=3)

→いずれも「時間になった／当該行動を行う状況となった」という判断と、その場合に「始める」という行動が想定される。後者は「自分の発表時間になった・または司会者に紹介された、よって始める」という判断を表明することが、進行が自分のコントロール下にあることを意味してしまうため使用しにくい。

(23)「さあ」が丁寧さを付与することについて

→「さあ」は A(相手の質問)に対して「わからない」という判断と「だから、どうしよう」という行動(模索段階)までを内包した、外界事象に対する反応(外界事象による影響の発露)。言語場で発露することで言語場にいる相手に届く。判断(分からない)から行動(どうしよう)までが内包されることから、結果的に「丁寧さ」を感じさせる効果が生じる。「自分をどう見せるか」が関与していると考えたと定延(2016)の説明になる。

10 結論

本研究では「さあ」を「 $[A=B] \rightarrow C$ 」を内包する形式であると考え、これが「さあ」の運用可否の問題を説明でき、また、「 $[A=B] \rightarrow C$ 」ではない場合に「さあ」が使えないことを確認した。「さあ」が「 $[A=B] \rightarrow C$ 」という関係性を内包すると考えると、散在していた「さあ」の運用例が一貫性を持って捉えられる。「さあ」は瞬時的・反射的な身体性の高い形式ではなく、「AはBだ。よって行動Cを生起する」という意識的な論理性の高い意味を内包する形式であると考えられるのである。

引用文献

- 定延利之(2016)『ひつじ研究叢書〈言語編〉第129巻 コミュニケーションへの言語的接近』、ひつじ書房
- 定延利之(2020)『発話の権利』、ひつじ書房
- 柴崎浩(2015)「判断と行動—臨床心理学の立場より—」『脳神経外科ジャーナル』24-11、pp.780-787、日本脳神経外科コンgres
- 前野隆司(2010)『脳はなぜ「心」を作ったのか—「私」の謎を解く受動意識仮説』、ちくま文庫
- 森重敏(1959)『日本文法通論』、風間書房
- 森山卓郎・張敬茹(2002)「動作発動の感動詞『さあ』『それ』をめぐって—一日中対照的観点も含めて」『日本語文法』2(2)、pp.128-143、日本語文法学会
- 山鳥重(2002)『「わかる」とはどういうことか—認識の脳科学』、ちくま新書

引用資料

- はあって言うゲーム(幻冬舎)
- goo 国語辞書(松村明監修『デジタル大辞林』小学館)(2021年3月24日検索)
- 山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之編(2020)『新明解国語辞典第8版』、三省堂

例文出典

- (日)：森下典子『日日は好日』、新潮文庫
- (か)：原ゆたか『かいけつゾロリのめいたんていとうじょう 27』、ポプラ社
- (逃)：野木亜紀子脚本・海野つなみ原作『逃げるは恥だが役に立つシナリオブック』講談社